

# 本学のスポーツ学に関するこの間の取り組みを振り返って

新井 博<sup>1)</sup>

## In the endeavor of developing Sports Study at Biwako Seikei Sport College

Hiroshi ARAI

キーワード：スポーツ学，びわこ成蹊スポーツ大学，取り組み

### はじめに

日本の体育・スポーツ界における学問の体系は、昭和25年日本体育学会の誕生によって体育学として認識されるようになった。その後、社会でのスポーツの普及発展と共に、1980-90年頃から体育学からスポーツ科学へ徐々に移行していった。以後、スポーツ科学から現在のスポーツ学へとまだ不確かではあるが、徐々に移行しつつあるように思える。

それは、今日学問の学的体系を表すスポーツ学といった用語が、徐々に社会で使用されるようになってきたことを指している。例として、何と言っても日本体育学会が編纂した「最新スポーツ科学事典」(2006)でスポーツ学について紹介していることである。さらに、今日スポーツ雑誌や大学の学部・学科案内などにおいても使われるようになっている。

だが、現在「スポーツ科学」の意味は「スポーツを考察の対象とした学問の総称」として理解され、一般に普及している。これに比べると、スポーツ学は「スポーツ科学と殆ど同じ意味」と考えられており、スポーツ科学と区別して特定の意味で明確な使われ方をしているわけではないのが実情である。

しかしながら、我がびわこ成蹊スポーツ大学では「スポーツ学とは何か」を考える必然

性が存在している。本学は全国に先駆けてスポーツを大学の名称に掲げて開学しており、学則(第5節, 第44条)に「卒業した者には、学士(スポーツ学)の学位を学長が授与する」と規定している。本学を卒業した学生はスポーツについて究めた「スポーツ学士」として世に羽ばたき、社会からスポーツ学士とは如何なる力を持つ人材か常に問われている。本学は開学以来、スポーツ学を柱に据えたカリキュラムを実施してきた。また、スポーツ学の発展のために積極的に研究成果を積み上げてきている。

今日、上でも述べたがスポーツ学はスポーツ科学と殆ど同じ意味と考えられ、スポーツ学独自の意味で使われていないが、本学ではその在り方について考えていかなければならない。否、考えるだけでなく、先駆的な考えを持ち続けていくために、積極的に問いかけていく必要がある。

現在本学は開学して11年目を迎え、これまでスポーツ学とどのように向き合ってきたのか振り返り、今後について考える良い時期に来ている。そこで本論は、本学の研究紀要の創刊号から現在の10号までに掲載されたスポーツ学に関する論文を中心に振り返り、今後について考えたい。

2003年からの10年間の特徴を鮮明にするた

1) 生涯スポーツ学科

めに3期に分け、第一期を開学当初、第二期を開学5年、第三期を開学10年前後として、本学では各時期にスポーツ学についてどのような取り組みをしていたのか特徴をつかみ、今後何が必要なのか考える材料になればよい。

## 1. 第一期「開学当初」におけるスポーツ学に関する学び

### 1) 2003年スポーツ学理解の取り組み

2003年4月開学すると、本学では教職員にスポーツ学について理解してもらい取り組みが行われた。本学の設置に直接関わった当時の学部長藤井英嘉は、文部科学省の大学設置審議会に申請した書類の抜粋〔「大学設置認可申請書」(抜粋)〕(平成15年5月23日)を配布して、スポーツ学についての理解を求めた。2003年当時、他に体育大学や体育学部といった名称は存在したが、スポーツを大学の名称にした大学は本学以外一つもなかった。もちろん、開学のために集まった最初の教員たちも、一部を除いてスポーツ学についての見識を持っていたわけではなかった。

既に学長経験と豊かな学識を持った藤井は、スポーツ学を柱に据えた本学の設置申請書を作成した。彼は、申請書の抜粋で「スポーツ学部とする理由」(Ⅲ. 2.)について分かりやすく説明している。少し長い以下に紹介する。

「スポーツ学部は、スポーツに関する理論を『スポーツ学』という概念で総合的に体系化されたものとして認識し、この『スポーツ学』を柱として、専門知識と実践能力を有する人材を養成する。ここで言うところの『スポーツ学』とは、スポーツに関する文化学、スポーツ医・科学、スポーツ教育学などの研究成果を基に、生涯スポーツと競技スポーツの両側面から現代社会に対応できるような学問の体系をさしている。また、従来の『スポーツ科学』が自然科学を偏重する意味で使用されてきたのに対して、本学ではスポーツ学を文化や教育の観点をも含めた総合的な理論

体系として捉えると共に、実践的な視点を重視する立場をとっている。このような点から、学部名称を『スポーツ学部』とすることとした。」

つまり、スポーツ学とはスポーツに関する広い研究成果を基に、生涯スポーツと競技スポーツの面から現代社会に対応できるような学問の体系で、文化や教育の観点をも含めた総合的な理論体系として捉え、実践的な視点を重視する立場であると述べている。

2003年の開学当初、教職員たちは「大学設置認可申請書」の内容でスポーツ学について理解しようとしていたのである。

### 2) 2004年本学研究紀要創刊号に記されたスポーツ学

2003年度版の本学研究紀要の創刊号が2004年3月に発行された。創刊号には、スポーツ学をテーマにして森学長の挨拶をはじめ、課題研究論文として「スポーツ学研究の課題と方法」のテーマで7本の論文が掲載された。しかし、全ての論文がスポーツ学との関係を明確に述べているわけではなく、自分の専門分野の過去を振り返り、今後の方向について述べている内容が多い。

ここでは、スポーツ学と専門の関係性について意識的に触れている内容となっている森、藤井、園山、海老島の論文を紹介する。

#### (1) 森昭三学長の挨拶

森学長(2004)は「『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』の創刊にあたって」と題して挨拶文を寄せている。現在、国民体育大会はスポーツの祭典であるにも拘わらず、体育の名称を使っている。このように、体育とスポーツは殆ど同意語として広く用いられているが、本学の名称については「『顔はスポーツであるが、中身は体育である』といった矛盾したことなく、『顔も、中身も真にスポーツをめざす』ことに挑戦したいと考える」と今後の抱負を述べている。

また、本学の将来の方向性について、近年

の社会的傾向から「スポーツ専門職業人の養成に重点をシフトすることへの挑戦である」と述べ、そのために「スポーツにかかわる専門職業人の養成を確かなものにしていくためには、背景となるスポーツ学の研究とその教育、より具体的に言えば、特集テーマでもある『スポーツ学研究の課題と方法』とその教育方法といったことが、常に問われ続け、教育に反映させなければならない」と述べている。

### (2) 藤井論文

藤井英嘉(2004)は「『スポーツ学』考—ターミノロジー(述語学)の視点—」のテーマで、スポーツ学について述べている。彼は「『スポーツ学』という述語が、今にたどりつくまでの状況を『スポーツ学以前』と言う項に、今検討されている述語の意味を『スポーツ学の今』という項に、そしてスポーツ学をめぐる将来的展望を『スポーツ学の展望』という項に区分して構成することにした」として、スポーツ学について述べている。

特に注目される内容は、1980年以降スポーツは普及発展するだけでなく、研究者の研究対象となりゴルフ学会、スキー学会、テニス学会などスポーツ種目毎の学会が續々誕生した。スポーツ界でも「科学化」することが盛んになった。しかし、2000年頃よりスポーツ科学の言葉が隆盛をきわめると、スポーツ科学に意味的偏重が訴えられるようになった。まさにその時期に、藤井は「『科学偏重主義からの脱出』『スポーツ科学偏重主義からの離脱』『経験知としてのスポーツ実践学の重視』『総合知としてのスポーツ学への道』という4つの観点に、『スポーツ科学』から『スポーツ学』への転換軸が存在する」と論を展開している。

ここで述べていることは、上記の大学設置認可申請書で示したスポーツ学の意味や必要性などの根拠となる内容について、稲垣正浩(「現代思想とスポーツ文化」2002)や寒川(「スポーツ学のみかた」アエラ1997)の論説

を紹介しながら分かりやすく説明している。

この年は開設年度にあたり、本学ではスポーツ学について理解を深め、今後の方向性について考え始めていたと言えよう。

### (3) 園山論文

園山和夫(2004)は「スポーツ教育学の研究動向と学校スポーツの展望」のテーマで論を展開し、Ⅲ.1.スポーツ学の構想と学校スポーツコースのテーマで、本学の学校スポーツコースが如何なる教員の養成をするべきか述べている。

「スポーツ学を上位概念におくことによつて、スポーツに関する『自然科学知』『人文学的知』『現場の経験知』『その他スポーツに関するあらゆる領域の専門諸学』をそこに包括することが出来る」として、学校スポーツが目指す新しいタイプのスポーツ教員、スポーツ指導者にはスポーツに関する総合的な知が求められる。特に変化の激しい今日、学校は今日的教育課題を多数抱えており、生徒理解をはじめ教育に関する幅広い知識や技能を有する教員が求められていると述べている。

また、園山はスポーツ学の主要な柱にはスポーツ教育が位置付けられている。スポーツ教育学の研究課題と実践課題は多い。スポーツ教育学は学校スポーツのみならず社会における多様なスポーツ活動も視野に入れた研究を展開しなければならない。学校スポーツ・学校外スポーツの両者を視野に入れつつ、「体育教師という教育専門職」と「地域社会のスポーツ専門職人」の養成に向けて、質の高い教育研究を指向した展開をしなければならないとしている。

### (4) 海老島論文

海老島(2004)は、「スポーツ科学からスポーツ学へ—社会学から見たパラダイムシフトの必要性—」といったテーマで述べている。内容は、スポーツ社会学が誕生した1960年代からのスポーツ社会学研究の流れを紹介している。

当初の研究は、社会現象としてのスポーツ

の社会的な機能の研究とスポーツを支配する法則を強調した内容（ケニヨンやロイ等）であった。1970-80年代となると世界的に隆盛した「マルクス主義」「フェミニズム」「エスニスティ」から影響を受けて、スポーツ社会学でもマルクス主義的アプローチ、フェミニズムのアプローチ、エスニスティ的アプローチが行われ、スポーツにおける問題を摘出している。また、1990年代に入ると、そういった大きな社会構造的な視点からのアプローチでは捉えきれない点を補う研究が現れてきた。それが「カルチュラルスタディーズ」や「フィギュレーション社会学」と呼ばれる研究である。現実社会を細かくリアルに見つめる方法で、社会構造からだけでは解明できない問題を丹念に補っている。それらの研究は欧米で始まるが、間もなく日本に持ち込まれ、盛んに行われるようになっていく。

一方で、1990年代スポーツはエリートスポーツの価値とイデオロギー支配によりエリートスポーツ隆盛とスポーツのグローバリゼーション現象が生じてきた。それらの中で遊戯性が忘れられることや疎外といった負の側面がクローズアップされてきた。

それに対して、本学の唱えるスポーツ学は①共生スポーツの観点、②スポーツ文化の観点、③実践学の観点（経験知）、④総合学の観点（総合知）を包括しており、行き過ぎたスポーツの方向性を修正すると考えられる。つまり、スポーツ学が生涯スポーツと競技スポーツの共生をもたらし、バランスのとれたスポーツ文化の生成を行うようになると述べている。

### 小括

開学当初、森学長は今後の「スポーツ専門職業人養成」のために、スポーツ学研究の課題と方法、教育方法を常に考えること、また藤井はスポーツ学提唱への包括的な理解、園山はスポーツ教育学を意識した教育、海老島は今日的課題へのスポーツ学の対応について

述べている。

これらの論文はスポーツ学を意識して述べているが、他の論調は必ずしも意識した内容といえない。つまり、この時期はスポーツ学への理解が、必ずしも十分であったわけではないと言えよう。

## 2. 第二期「開学5年」を経た本学におけるスポーツ学に関する学び

なぜ、第二期の区切りを「開学5年」にしたのかと言えば、2005～08年発行の研究紀要（第2号～第4号）ではダイレクトにスポーツ学をテーマにした論文が掲載されず、2009年発行の研究紀要第5号に江刺幸政による「『スポーツ学』の探求と『学校スポーツコース』」といったスポーツ学をダイレクトなテーマとした論文が発表されたからである。

### (1) 2009年発行の本学紀要第5号に記されたスポーツ学

江刺は、今日のスポーツ学の意味の曖昧さについてこう述べている。「『体育学』『スポーツ科学』とほとんど同義に使用されているのである。それ故、『スポーツ学とは何か』について正面から問うているものはほとんど無いと言って良い」。

彼はスポーツ学が固有の学問領域として成り立つためには、「研究対象」と「研究方法論」が明確になることが必要であるとして、それらについての提案を行っている。

#### 「運動文化領域」

彼は「研究対象」と「研究方法論」を述べる前に、身体運動の捉え方が大切であると前置きして、身体運動とは、価値観と技術観から「運動文化領域」として捉えることが出来ると力説する。運動文化の五領域である「作業運動」「日常的運動」「スポーツ運動」「表現運動」「体育的運動」について、個々の特徴を個別に紹介している。また、価値観や技術観の違いから運動文化領域でもっていた価値体系と五領域を体育的運動として見たときの価値観の違いについても説明している。

それによって江刺は、体育の下位概念であるスポーツは当然多様な価値観で理解され、異なる技術追求の過程のもとで理解されなければならないとしている。また「こうした研究対象の多義性という事態は、『スポーツ学』研究の基本的性格を規定することになる。つまり『スポーツ学』は『スポーツを巡る価値体系（と技術体系）およびその相互の関係を研究する学問』である」と述べている。

上の運動文化領域の説明は、彼が研鑽を積んできた運動文化を前提とした枠組みであり、スポーツとの関係性について、運動者の価値を問題として課題やその方法論を設定するという考え方である。

#### 「研究対象」

彼は、スポーツ学を構築するために必要な「研究対象」とは、一つ目に乳幼児期、学校期、成人期以降、老人期におけるスポーツの機能についてであるとしている。

二つ目の研究対象は、学校期における運動文化論領域で述べた「日常的運動」「スポーツ運動」「体育的運動」の相互関係の解明であるとしている。

学校スポーツコースの研究・教育の課題は、「学校期」に特徴的な四つの価値体系の衝突、つまり学校期における「日常的運動（観戦行動としての対象としてのスポーツ、レジャーの内容として行うスポーツ）、体育運動としてのスポーツ、運動部活動としての競技スポーツ及び将来の労働としての作業運動への準備という、価値体系や技術体系の衝突と解決の方法を、体育的運動を中核として研究・教育することにあるとしている。

#### 「研究方法論」

彼は、スポーツ学の研究方法論への探究という視点から以下のように述べている。スポーツ学とはスポーツという現象について科学的に探究する学問であり、科学の論理として「問題の明示」「仮説の提示」「仮説の真偽の実験による検証」「結果の公表」が前提である。それを継続することによって、固有の概念、

用語、方法が現れてくる。学問領域への期待からいえば、既存の方法論ではなく「スポーツ現象に関する未知の問題の提示」「仮説の提示＝仮説の有効性への考察」という局面への強い問題意識と動機が必要である。そして、新しい解決方法としての実験方法の模索が必要になるとしている。

#### 「最後に本学でのスポーツ学への取り組みの観点」

彼は、本学でのスポーツ学への取り組みの観点として以下の4点を挙げている。

1. スポーツを巡る様々な認識レベルを確認しつつ、問題自体を研究する体制が必要になる。特に、「仮説的」原因－結果関係認識、「要素的」原因－結果関係認識のレベルを基礎とした「因果的」原因－結果関係認識という視点が重要である。
2. スポーツといわれる人間的行為を、どのような枠組みで捉えるのかを論理的に明確にしつつ研究する必要がある。その際、五つの運動文化領域という視点は有効な視点となる。
3. 個々人の人間的行為において「スポーツ」という現象がどのように現れ、追求されていくのかを解明する必要がある。
4. びわこ成蹊スポーツ大学における「スポーツ学」の探求のためには、上記の三点への共通理解と研究・教育体制への更なる検討、合意が必要である。

全体としては、大凡以上である。彼の論調（運動文化論など）は難しいので、彼の主張を正確に紹介しきれているか自信は無い。だが、2007年に本学に赴任してきた江刺は、長い間体育科教育の世界で研究成果を積み上げ、「運動文化論」領域を中心に据えた研究分野で優れた見識を磨いてきた人物である。その彼の意識が、内容ににじみ出ていることを理解してもらいたい。

江刺は本学で提唱しているスポーツ学の確立のために、学校スポーツコースの立場から

彼の主張する運動文化論の5領域を有効な分析手段として、スポーツのもつ様々な価値を、価値観と技術観を中心に体系づけようと提案していると言えよう。ここでは説明していないが、彼の論文では個体発生や科学論に関する彼の見解も披露していることを付け加えておく。

### 小括

2003年度以来3年間、スポーツ学についての論文が無かった中で、2008年の江刺の論文は強烈なインパクトが感じられる。それは、彼が学んできた運動文化論の立場からのスポーツ学構築の提案であったからである。彼の主張する運動文化論の5領域を有効な分析手段として、スポーツのもつ様々な価値を、価値観と技術観を中心に体系づけようと提案していると言えよう。

## 3. 第3期「開学10年」前後の本学におけるスポーツ学に関する学び

### 1) 開学9年目の本学におけるスポーツ学に関する学び

2013年に開学10年を控えて、2012年10月にスポーツ学について考えるシンポジウム(テーマ:スポーツ学再考)が本学で開催された。開学して間もなく10年が経とうとしている時期、本学ではスポーツ学について如何に捉えているのか考えてみようといった趣旨であった。シンポジウムでは、新井が「スポーツ学再考」のテーマで述べた後、各コース代表が同テーマに関して各コースの考えを述べている。述べられた内容が、紀要第9号(2012)に「スポーツ学再考」として掲載されている。以下では、この時期どのように考えられていたのか明らかにするために、新井から順に各コースの中野友博、金田安正、柴田俊和、若吉浩二、村田正夫他、吉田政幸、豊田則成により紹介された内容を概観してみよう。限られたスペースと中身の齟齬については、お許し願いたい。もちろん本文を参考に

してもらいたい。

### (1) シンポジウム・スポーツ学再考

新井(2012)は、今日までのスポーツについて歴史的な流れを大凡説明し、続いて体育学からスポーツ科学への概念の流れを解説し、さらにそこからスポーツ学構築へ向かう可能性について探った。

新井は、スポーツ学構築に次のような方向性が望ましいのではないかと述べている。1968年の夏季メキシコオリンピック大会に際して開催された国際スポーツ科学会議で、スポーツとは「プレイの精神を持ち、自己または他人との闘争、或いは自然の障害との対決を含むもの」といった定義がなされた。新井はその定義を基にして、スポーツは「遊戯の要素を含んでいること」「フェアプレーなどの規範によって統制されていること」「競争・挑戦の要素を含んでいること」「活発な身体運動であること」の四つの要素を持っている。であるから、四つの要素を価値として考えるとそれぞれ「遊戯価値」「統合価値」「克服価値」「運動価値」と言い換えることが出来る。つまり、スポーツとは四つの価値が存在すると言えるのである。また、その価値とは、スポーツが文化として成り立つための要素となり得る。

そのことにより、スポーツ学の研究対象はスポーツ文化である。そのため、各研究分野は互いに有機的な関係性を持ちながら、それぞれ遊戯、統合、克服、運動の価値について学問的に問い続けることであるとしている。

### (2) スポーツ学再考「野外スポーツの位置」

中野(2012)は、スポーツ学になぞらえて「野外スポーツ」の位置づけを考えてみると前置きして、政府の指導要領などによる野外スポーツのとらえ方が、戦後どのように変化してきたのか明らかにした。そして、本学の野外スポーツコースの考えとして、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーを紹介している。

ディプロマポリシーは次のようである。

「自然の中でのスポーツを通して自らの感性を磨き、環境を配慮した安全で楽しい野外スポーツプログラムを提供する専門知識と技術を有したリーダー的立場になる人材、子どもから大人まで幅広い対象者に、生涯を通じて自然中でのスポーツを提供できる資質・能力を備えた人材を育成します」。

カリキュラムポリシーは次のようである。『『自然、人、体験』に関わる研究成果に基づいた教育活動の中で、人々が豊かに生きるための『社会性』『自主性』などあらゆる『生きる力』を育むために、実践的・実証的・理論的に野外スポーツを探求します』としてきたと述べている。

### (3) 本学におけるスポーツ学の構築をめざして—地域スポーツコースの在り方—

金田 (2012) は、文部科学省への本学の申請書の内容から開設時における地域スポーツコースのあり方について概念的に説明した。また、ヨーロッパのトリム運動から世界的に広まったスポーツの潮流から始まる生涯スポーツへの経緯や、日本でのみんなのスポーツの流れについてスポーツ振興法などに触れながら説明し、今後さらにスポーツが地域との結びつきを深めることが重要視されることを述べている。

また、それらへの地域スポーツコースの望ましい対応の形などについても紹介している。さらに、障害者スポーツの側面からみたスポーツ学についても言及している。

### (4) 学校スポーツコースからみたスポーツ学

柴田 (2012) は、政府による学校体育政策の目的と本学の学校スポーツコースの在り方を比べて、スポーツ学の構築を目指す学校スポーツコースの方向性について述べている。

つまり、戦後政府は、学習指導要領によって時代に沿った学校体育の在り方(目標)を適宜示してきた。そして、今日「生きる力」を我々の前に目標として示している。それに対して、本学の学校スポーツコースが目的とする人材育成の内容は、学校以外でのスポー

ツまで視野に入れている点で、従来の学校体育で追及する教師の力量では足りないことを指摘している。

そのために、具体的に求められている学校スポーツコースの学修の主要課題は「授業構想力を高めることであり、教材開発力、授業実践力、授業分析と授業改善の力を身につけること」と付言している。

### (5) スポーツ学再考—スポーツ科学なくして、スポーツ学はなし

若吉 (2012) は、「あくまでも私見ではあるが、スポーツ科学からみたスポーツ学の位置づけや双方の関係、さらにはスポーツ学とは何かについて、考えてみたい」としてそれぞれの点について述べている。

自身の経験や仲間の取り組みから「実践的なスポーツのフィールドにおいては、スポーツ科学に基づいた考察の考察が、スポーツ学として求められる」としている。特に、選手とトレーナーの関係や科学とコーチングの関係、またスポーツドクターが感じている非科学性の科学について紹介している。

私見であると前置きしながら「スポーツ科学とスポーツ学の両面からの進歩があるからこそ、スポーツ文化が創造される」とスポーツ科学とスポーツ学とスポーツ文化の関係について述べている。

### (6) スポーツ学再考—新しいスポーツコーチング学の創出—

村田 (2012) は、「コーチングコースが目指すスポーツ学の創出とは、・・・ナレッジマネジメントを用いて、コース教員の高質な知識(暗黙知)を共有化し、それを形式知化して教員間や学生への知的財産として共有することである」と述べて、ナレッジマネジメントの紹介と、SECIモデルの構築について述べている。

ナレッジマネジメントは、形式知(言葉や文章で表現できる客観的で言語的な知)、暗黙知(言葉や文章で表すことが難しい主観的で身体的な知)、高質の暗黙知(主観的で身体

的な知をトップレベルの世界での経験を通して研ぎ澄まし培った知的能力)として、コースが「知的財産として共有できるものを創出していく」としている。

SECIモデルは、①共同化=獲得した暗黙知を共有、創出するプロセス ②表出化=得られた暗黙知を共有できるよう形式知に変換するプロセス、③連結化=形式知を組み合わせ、新たな形式知を創造するプロセス ④内面化=利用可能となった形式知を個人が体得するプロセスとしている。

#### (7) スポーツ学再考—スポーツビジネスマネジメントの立場から—

吉田(2012)は、国際学会で議論されてきたスポーツマネジメントの学術的な独自性に関する見解を紹介しながら、スポーツ学の認識と照らし合わせることで、スポーツビジネスにおけるスポーツビジネスマネジメントについて述べている。

続いて、「スポーツビジネスマネジメントとは」として、スポーツとビジネスとマネジメントの関係構造を明らかにして、本来の経済学や経営学に強くシフトした立場からでは、スポーツビジネスマネジメントは立ちいかないと警鐘を鳴らす。その背景には、今日のドーピングなどのスポーツビジネスに山積みする問題を、人文的科学的な価値を重要視する立場から抑制をかけないと健全なバランスが保たれないからであるとしている。

その点で、本コースは経済発展の分野以外におけるスポーツ系学部コースからの多くの研究成果をマネジメントすることに特有の意義を持っている。スポーツの文化的側面と産業的側面を学術的に調和させた分野がスポーツ学におけるスポーツビジネスマネジメントとなるとしている。

#### (8) スポーツ情報戦略の挑戦

豊田(2012)は、スポーツ情報戦略のキーワードは「科学的分析」と「還元」であるとしている。また今日スポーツへの関わり方が多様化・拡大するなかで、本コースがスポーツ

学において果たす役割は、新たな視点のアプローチを創り上げることであるとしている。

そこで、スポーツ学を科学するために必要なことは、①研究の透明性を確保すること、②研究成果を視覚化すること、③自覚的な取り組みであることを挙げている。

現在、本コースは教育概念として①科学的分析力と②還元力を養うことにスポーツ心理学(こころの分析)やスポーツバイオメカニクス(うごきの分析)、スポーツ戦術論(戦術の分析)、スポーツ映像処理論(映像の分析)を中心に教育体制を組んでいる。最終的な目的は、スポーツフィールドをよりよく変えていくパワー(先に示した還元力)を有していなければならないとしている。

以上により、ここでは概ね「経験知としてのスポーツ実践学の重視」や「スポーツ科学偏重主義からの離脱」などの論説に依拠して、私見を交えた論文が掲載された。

## 2) 開学10年目の本学におけるスポーツ学に関する本学の学び

2013年3月発行の研究紀要第10号で課題研究論文として「スポーツ学の10年」の特集が組まれた。各コースから中野友博、松山尚道他、柴田俊和、大久保衛、村田正夫他、吉倉秀和、豊田則成他によって「スポーツ学の10年」のテーマで、各コースによるこの間の歩みを中心に述べてもらった。

### (1) スポーツ学の10年「野外スポーツ、この10年」

中野(2013)は、野外スポーツコースでは野外スポーツを志向性の観点から競技、レクリエーション、健康、教育に分類し、それぞれへの志向についてディプロマポリシーとカリキュラムポリシー(上記で記述)を策定したとしている。またそれに従って、野外スポーツそのもののスキルや理論の獲得、実習の上に「教育・指導」を位置づけ、指導法についての事業展開を行っているとしている。

### (2) 地域スポーツコースの10年



松山 (2013) は、アドミッションポリシーを紹介している。

「地域スポーツでは、人々の生活基盤である『地域』における多様なスポーツに関する研究を行い、日常生活の中における余暇活動を充実させ、生活の質の向上に寄与できるような地域スポーツのあり方を、実践的・実証的・理論的に探究します。多様化し、多志向化する地域スポーツの現場において、こどもから高齢者まであらゆる対象の人がスポーツを楽しめるよう、様々なスポーツプログラムの企画・運営能力・指導技術を高める環境を『地域』につくることのできる人材を実習をとおして育成していきます。『地域』の人々の健康や福祉（より良い生き方をめざす）に貢献するスポーツのあり方に関心のある人、スポーツを核とした地域づくりに関心のある人を求めていきます。」

また、コースの構成員のこの間の活動について個々に紹介している。

### (3) 学校スポーツコースからみたスポーツ学の10年

柴田 (2013) は、日本では戦後学校体育や体育科教育が中心となり、世界に劣らぬようにスポーツに関する学問的アプローチを行ってきた。1990年代後半には、いじめ、引きこもり、不登校などの子どもの心と体に対応することが、体育科教育の重要課題となった。体育科教育とスポーツ教育のところでは、体育科教育学が体育授業を具体的な研究の問題・対象とすることに対して、スポーツ教育学がスポーツ教育を研究の対象とする点で違うが、本学で生涯スポーツを推進するためには、学校外に拡大したスポーツ教育学が必要であるとしている。

また、寒川氏の言葉を借りて「体育学がスポーツ科学へ発展したことがもたらした高度専門分科とそれゆえに親科学への解体吸収の恐れは、学校体育をめぐる問題の科学論によって、スポーツ科学の諸専門学を一つに繋ぎ止める可能性を孕んだ核になる」と紹介して

いる。

### (4) スポーツ学の10年—特にトレーニング・健康コースの歩みから—

大久保 (2013) は、次のような説明を行っている。

「スポーツ活動を自動車の運転になぞられたもので、心技体のうち体の部分を詳しくみたものである。車が走るためには様々な条件が必要であるが、まず、燃料は必須である。いうまでもなく、これはスポーツ栄養学とよばれる領域である。次いでこれらの栄養が効率よく燃焼しエネルギーに転換されなければならない。消化器、呼吸器や循環器などが該当し、これらは運動生理学やスポーツ生理学、スポーツ内科学の領域である。最後に実際に車が走るためには筋肉が発揮した力を、タイヤに駆動力として伝達するための車軸やギヤが必須であり、加えてスムーズな走りのためには道路の凹凸に対応できるスプリングなどが必要である。これらは骨格や関節、腱・靭帯が該当し、筋肉を含めて運動器と呼ばれている。これはスポーツ整形外科やリハビリテーション医学の領域に含まれる。」

### (5) びわこ式 スポーツコーチングの変革—柔道 元全日本代表監督 佐藤宣踐氏を招いての講演会報告—

村田 (2013) は、コースで行ってきた取り組みを紹介している。本コースは「新しいスポーツコーチング」とは何たるかを明らかにすることを目的に「びわこ式 スポーツコーチングの変革」と題して、世界レベルや日本トップの指導経験を有するコース教員による研究会を継続的に開催し、「暗黙知」を「形式知」するために努力を続けている。

ここでは柔道元全日本代表監督佐藤宣踐氏を招いての講演会報告を紹介している。そこで、「組織力」には競技者、指導者、理解者・行政指導者、スポーツの医科学研究者、ファンが必要である。また、競技スポーツは教育の一環であり選手に社会性を身につけさせ、社会に貢献できる人作りをしなければならな

いとしている。

#### (6) スポーツ学の10年 —スポーツビジネス研究領域の立場から—

吉倉 (2013) は、ここ10年のスポーツビジネス研究領域を振り返り、将来への展望について考察するとしている。現在のスポーツマネジメントは、学校体育の管理学からハイブリット化しながら発展してきたスポーツ界のニーズに応えながら発展・充実してきた。

2003年以降の『スポーツ産業論』に掲載された論文を振り返ると、2007年には「スポーツイベント」「ファイナンス」「地域活性化」に関するトピックが追加された。2008年には「スポーツサービス」「消費行動」「IT」と言ったキーワードが追加された。新たな価値や斬新なサービスが提供されるようになった。

近年のマーケティング研究に目を向けても、プロダクトやサービスに関する企業と顧客（消費者）の共創を通じて、価値を創造することが求められるようになってきている。今、スポーツビジネスの世界では、「するスポーツとみるスポーツの生産と提供に関わるビジネスのマネジメントが求められている」。

今後、スポーツビジネス研究領域におけるスポーツ学の未来として、「実務」「教育」「研究」という3つのファクターを融合させ、乗数的な好転および変化をもたらすようなケミストリーを起こさなければならない」としている。

#### (7) スポーツ学の10年を振り返って —スポーツ情報戦略の立場から—

豊田 (2013) は「スポーツ情報戦略の可能性」「スポーツにおける情報戦略の役割」「スポーツ情報戦略の挑戦」「スポーツ情報戦略に関するネットワークコミュニティの構築」の点からこの10年を振り返っている。

スポーツ情報戦略の可能性については、2007年に本学の紀要で「スポーツ情報戦略の可能性」で詳しく説明したとしている。

スポーツにおける情報戦略の役割については、2008年の「スポーツ学のすすめ」の中で

解説したと述べて、さらに本コースの理論的構造は【〈科学的分析〉+〈還元〉=〈スポーツ指導支援〉】であると改めて述べている。

スポーツ情報戦略の挑戦では、2011年の本学紀要で「スポーツ情報戦略の挑戦」で紹介しているとして、特にスポーツ科学を科学する立場についての理論的感受性を強調している。スポーツ情報戦略に関するネットワークコミュニティの構築については、2011年のアカデミックアワー研究報告の中で紹介している。

まとめとして、本学のスポーツ情報戦略はまだ揺籃期にある。これまでに明らかになったことは、その到達点が「スポーツ指導支援」にあるということであった。今後もこの観点から科学的知見を蓄積していくことで、コースの充実を図りたいと述べている。

#### 小括

開学9年目の研究紀要の課題研究「スポーツ学再考」として掲載された各コース代表の論文の特徴は、言うなれば第1期、第2期の論文が藤井等のスポーツ学の意味をそのまま理解しようとしていたことに比べて、理解において差があることが分かった。背景には、スポーツ学を意識して日々研究や授業を進めているからと考えられる。

開学10年目の研究紀要から、第2期からコースによって具体的な取り組みをするなど温度差はあるが、本学が唱えるスポーツ学が「一体如何なるものか」問い続けてきていると言えよう。

#### まとめ

本学のコースにおけるスポーツ学に関する取り組みについて、この10年間を三期に分けて特徴を探ってみた。すると、全体的に見て第一期の特徴は、藤井らによるスポーツ学についての啓蒙の時期であったと言えよう。第二期の特徴は、江刺論文によりスポーツ学構築へ弾みがつき、第二期の後半以降コース毎の独自の取り組みが始まった時期と言えよ

う。第三期の特徴は、コース毎の温度差はありながらも目指すものが決まりつつある時期と言えよう。

ここでおしなべて言えることは、コース毎の意識の差が出来つつあると言うことである。コース毎に他のコースの進展について目をやり、構築への努力を期待する。

### 参考文献

- 新井博 (2012) シンポジウム・スポーツ学再考, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 9: 9-16.
- 海老島均 (2004) スポーツ科学からスポーツ学へ—社会学から見たパラダイムシフトの必要性—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 1: 73-86.
- 江刺幸政 (2008) 「スポーツ学」の探求と「学校スポーツコース」, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 5: 37-52.
- 藤井英嘉 (2004) 「スポーツ学」考—ターミノロジー (術語学) の視点—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 1: 7-28.
- 金田安正 (2012) 本学におけるスポーツ学の構築をめざして—地域スポーツコースの在り方—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 9: 21-26.
- 松山尚道・他 (2013) 地域スポーツコースの10年, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 10: 13-24.
- 村田正夫 (2012) スポーツ学再考—新しいスポーツコーチング学の創出—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 9: 37-38.
- 村田正夫・他 (2013) びわこ式 スポーツコーチングの変革—柔道 元全日本代表監督 佐藤宣践氏を招いての講演会報告—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 10: 37-48.
- 森昭三 (2004) 「びわこ成蹊スポーツ大学紀要」の創刊にあたって, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 1: 1-2.
- 中野友博 (2012) スポーツ学再考「野外スポーツの位置」, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 9: 17-20.
- 中野友博 (2013) スポーツ学の10年「野外スポーツ, この10年」, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 10: 11-12.
- 日本体育学会 (2006) 最新スポーツ科学事典, 平凡社: 東京
- 大久保衛 (2013) スポーツ学の10年—特にトレーニング・健康コースの歩みから—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 10: 29-36.
- 柴田俊和 (2012) 学校スポーツコースからみたスポーツ学, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 9: 27-30.
- 柴田俊和 (2013) 学校スポーツコースからみたスポーツ学の10年, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 10: 25-28.
- 園山和夫 (2004) スポーツ教育学の研究動向と学校スポーツの展望, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 1: 37-48.
- 豊田則成 (2012) スポーツ情報戦略の挑戦, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 9: 45-50.
- 豊田則成・他 (2013) スポーツ学の10年を振り返って—スポーツ情報戦略の立場から—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 10: 55-60.
- 吉倉秀和 (2013) スポーツ学の10年—スポーツビジネス研究領域の立場から—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 10: 49-54.
- 吉田政幸 (2012) スポーツ学再考—スポーツビジネスマネジメントの立場から—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 9: 39-44.
- 若吉浩二 (2012) スポーツ学再考—スポーツ科学なくして, スポーツ学はなし—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 9: 31-36.